

いしころ

猫田 あきと

いしころ

ある山に、たくさんの石ころたちがいた。

ほとんどの石ころはだまってしゃべろうとしなかったが、

一つだけ、おしゃべりな いしころ がいた。

いしころは自分が石ころなのが、イヤでイヤでしかたなかった。

石ころなんてつまらないし、何もできないし、だれも見向きもしない。

だから、いつも他のものになりたがっていた。

あるとき、鳥が空を飛んでいた。

いしころは鳥になりたいと思った。

「鳥さん。ぼくは君みたいに空を飛んでみたいんだ。

きれいな声で歌ってみたいんだ。

どうしたら君みたいになれるんだい？」

いしころは鳥にたずねてみたが、鳥は知らん顔をして飛んでいってしまった。

あるとき、リスが木の上を走っていた。

いしころは、リスみたいになりたいと思った。

「リスさん。ぼくは君みたいに木の上を走ってみたいんだ。

楽しくとび回ってみたいんだ。

どうしたら君みたいになれるんだい？」

いしころはリスにたずねてみたが、リスは知らん顔をして走っていってしまった。

あるとき、雨がふっていた。

いしころは雨みたいになりたいと思った。

「雨さん。ぼくは君みたいに空から広い世界を見てみたいんだ。

あちこち、たびをしてみたいんだ。

どうしたら君みたいになれるんだい？」

いしころは雨にたずねてみた。

すると雨はこう答えた。

「川にながされて海へ出てごらん。そうすればお日さまが私たちを空へつれていってくれるよ。」

いしころはそれを聞くと、うれしくなって、自分も雨になってみようと思った。

それで、雨たちといっしょに、川のほうへところがって行った。

いしころが川に飛びこむと、川が背中をおしてくれて、いしころは川ぞこを ゆっくり
ゆっくり ころがっていった。

「ぼくは雨になるんだ！」

いしころを大きな声でさけんで、川の中をころがっていった。

いしころは、このちょうしで行けば海にもすぐつくだろうと思っていた。

しかし、二、三日すると川のように変わってきた。

だんだん水がへって、ながれもゆっくりになってきた。

そしてとうとう、いしころは前にすすめなくなってしまった。

「まって！ぼくもつれて行って！」

いしころはさげんだが、川の水はいそがしそうに先へ先へと山を下って行ってしまった

。

いしころは一人ぼっちになってしまった。

そして、さみしくなってわんわん泣いた。

いくらなみだをながしても、なみだは、いしころを海にはつれていってくれなかった。

いしころは何日も何日も泣いて、一しゅうかんたったころ、泣きつかれてねむってしまった。

そして、何日も、何か月も、いしころが目をさますことはなかった。

それから、どのくらいたっただろう。

いしころが目をさますと、そこは、はまべだった。

ねむっているあいだに、雨が海まではこんでくれたのだ。

いしころはうれしくなったが、自分のすがたを見てがったりした。

いしころは雨にはなっていなかった。

空をいくらながめても、ぜんぜん近くならないし、お日さまは、いしころを空につれていってくれるようすもなかった。

いしころが、もう空を見るのをやめようと思ったそのとき、きゅうに空が近づいた。

「お母さん、見て！この石まん丸でとってもキレイだね。」

女の子が、いしころを手にとって、キラキラしたひとみで見つめていた。

「本当ね、とってもキレイね」

女の子のお母さんも石ころを見ていた。

女の子は、石ころをポケットに入れた。

ポケット中はとってもあったかかった。

石ころは、それでしあわせだった。

～おしまい～